

令和元年度
横浜市立高等学校
及び
併設型中学校
自己評価書

横浜市立横浜サイエンスフロンティア
高等学校附属中学校

<学校情報>

1 課程・学科 全日制課程・理数科

2 学校長 永瀬 哲 (令和2年4月1日現在 在職2年目)

3 学校教育目標

- 1 広い視野、高い視点、多面的な見方を身につけさせ、ものごとに対する柔軟な思考力・解析力を培い、論理的頭脳を養う。
- 2 旺盛な探究力、豊かな創造力、世界に通じるコミュニケーション能力、自立力を培うことによって、よりよく生きる知恵を養う。
- 3 社会における己の使命を自覚し、積極的に社会に貢献しようとする志を養う。
- 4 人格を陶冶し、有為な社会の形成者としての品格を養う。
- 5 幅広い知識と教養を身につけ、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな心身を養う。

4 教育方針

驚きと感動による知の探究

《教育理念》

学問を広く深く学ぼうとする精神と態度を培いながら、生徒一人ひとりが持つ潜在的な独創性を引き出し、日本の将来を支える論理的な思考力と鋭敏な感性をはぐくみ、先端的な科学の知識・技術、技能を活用して、世界で幅広く活躍する人間を育成する。

5 教職員数 (令和元年12月1日現在)

学校長 1 校長代理 1 副校長 1 事務長
教諭 15 (男 11、女 4) 養護教諭 1
実習助手 事務職員 1 技能職員
A E T 1 非常勤講師 7 管理員

6 生徒在籍数 (令和元年12月1日現在)

年次(学年)	学級数	男子	女子	合計
1	2	40	40	80
2	2	40	40	80
3	2	40	40	80
合計	6	120	120	240

7 回収率

		依頼数	回答数	回収率
教職員		19	19	100%
生徒	1年	80	80	100%
	2年	80	78	98%
	3年	80	76	95%
	4年	0	0	0%
	合計	240	234	98%
保護者		240	204	85%

8 自己評価実施日

教職員	令和元年12月4日～令和元年12月13日
生徒	令和元年12月4日～令和元年12月16日
保護者	令和元年12月4日～令和元年12月20日
地域	令和元年11月8日～令和元年12月21日

9 集計・分析期間

令和2年1月15日～令和2年2月28日

10 自己評価書の公表方法・時期

○集計結果は令和2年2月下旬、分析については、令和2年5月中旬以降本校ホームページで公表の予定

<自己評価>

1 第3期横浜市教育振興基本計画の推進状況

□魅力ある高校教育の推進状況

(関連アンケート番号：教職員 1, 2, 3, 9, 10, 13, 14 生徒 I-1, 6 保護者 I-1 II-1

経年変化 1, 2, 5, 10)

取組	<ul style="list-style-type: none">○中高一貫教育による国際社会で活躍する人材の育成に向けて、6年間の計画的で継続的な教育活動の充実・推進に努めている。○「スーパーサイエンスハイスクール」の指定を受け、「先端科学技術の知識を活用して、世界で幅広く活躍する人間の育成」を目標としている横浜サイエンスフロンティア高校の附属中学校として、グローバルリーダーたる*1「サイエンスエリート」の育成を図っている○高等学校の*2サイエンスリテラシーにつながるサイエンススタディーズ（総合的な学習の時間）やフロンティアタイム（本校独自の週2時間の授業。自主研究、読書活動、進路探究、相談・面談等を通して豊かな感性を育み、自分自身を開拓する時間。）を核とした教科等横断的なカリキュラム編成を行うとともに、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善を進めている。○「サイエンスエリート」に必要な*3「サイエンスの考え方」を育むために、次の4つのフェーズ 「Discussion」…物事を正確に捉えて考察し討議する 「Experiment」…仮説を立てて論理的に実証する 「Experience」…フィールドワークなど実体験から学ぶ 「Presentation」…自分の考えや意見を正確に相手に伝える <p>を繰り返す DEEP 学習を授業に取り入れ、探究心を養いながら知識と智慧のサイクルのスパイラルアップを図っている。</p> <ul style="list-style-type: none">○中高一貫教育を推進するために、国語・社会・数学・理科・英語の授業で少人数授業又はティームティーチングを行い、中学と高校の教員が連携して指導している。○元年度は引き続き、本校に関わる外部機関（研究機関・大学・企業等）と連携しての教育活動及びICT機器（タブレット等）の活用の充実を図ってきた。 <p>*1…次世代の日本を担う使命感を持ち、科学的リテラシーを身に付け、物事をやり通す強い精神力や活動の源である体力を備えた国際社会で活躍する人材。</p> <p>*2…スーパーサイエンスハイスクールの課題探究型授業。1年次で科学的な見方・考え方、探究活動の基礎を学び、2年次に課題探究を行う。</p> <p>*3…サイエンスを学ぶことによって培われる考え方。正確な観察や実験、体験、情報の整理・分析などを合理的・総合的に進めるもので、科学のみならず、様々なものの考え方の基本につながる。</p>
----	--

成 果

- 教職員アンケートにおける「『魅力ある高校教育の推進』に向けて学校全体として取り組んでいる」「(教育課程・編成)学校教育目標・学校経営目標を踏まえて編成されている」「(教育課程・取組)学習指導要領の趣旨及び横浜市の方針に基づき、さらに中期学校経営方針に掲げた目標の実現を目指して編成し、取り組んでいる」の各項目において、いずれも肯定的な回答が90%を超えている。これは、着任者研修や職員研修会、本校常任スーパーアドバイザーの浅島誠先生及び特別科学技術顧問の小島謙一先生からの幹部会等における指導を通して、本校の教育理念、教育目標及び教育方針並びに市民のニーズを教職員がしっかりと理解・共有し、実践している結果である。(1ページ教職員アンケート1,2,3)
- 生徒アンケート項目「本校の生徒であることに誇りを感じている」において92%が肯定的な回答で、そのうち61%が「そう思う」と回答している。生徒の主体的な学校選択に応える学校教育活動を展開することができていると考えられる。(4ページ生徒アンケート学校生活等について1)
- 保護者アンケート項目「様々な教育活動を通して、先端科学技術の知識を活用して、世界で幅広く活躍する人材を育てている」及び「中高一貫校として、特色のある教育課程が計画的・継続的に展開されている。」において、いずれも90%以上が肯定的な回答である。基盤形成期である中学生が、質の高い経験や豊かな感動を仲間とともに経験し、科学の楽しさや知る喜びに気付き、充実発展期である高等学校へつなげるために、本校の特色であるDEEP学習やサイエンススタディーズ、フロンティアタイム、校外研修などの教育活動を充実させていることについて「学校便り」「学年便り」や保護者会等の機会を活用して周知し、保護者の理解を得ることができている結果である。(5ページ保護者アンケート教育活動等について1,2)
- 高校の教員も附属中学校の教科指導や部活動指導を行うことを通じて生徒や保護者に対する理解が深まるとともに、6年間を通じたカリキュラム・マネジメントを行うことにより、学習指導や学習評価についても中学の教員と共有することができている。
- 高校の開校以来10年間にわたって蓄積してきた高校のリソースや経験を生かして、外部の研究機関・大学・企業の支援を受けて総合的な学習の時間である「サイエンススタディーズ」としての出張授業や事業所見学等を実施している。このことについて、学校運営協議会からも「中学生は自身のキャリア形成についてこれから考えていく時期である。そのような「サイエンススタディーズ」における様々な学び(講演、実習や演習、事業所見学)の中でいろいろな「ほんもの体験」をさせることは大変魅力的だ。さらなる充実を図ってほしい」との助言をいただいている。

<p>課 題</p>	<p>○生徒アンケート項目「災害時の校内の避難経路を把握している」において、「あまりそう思わない」が21%、「そう思わない」が10%となっている。保健安全に関する指導の充実を図り、地震や風水害等に対して平時から備える意識を醸成することで、「誰もが、安心して、豊かに」生活することのできる学校作りに引き続き取り組むことが必要である。（3ページ生徒アンケート教育活動等について4）</p> <p>○中高一貫教育を推進するために、高校の教員が中学の授業や部活動の指導を担当するとともに、生徒会活動や学校行事を中高合同で実施実行している。附属中学校が完成の年度を迎え、教員数も増加したので、中高の教員が一体となって中高一貫教育を推進するための適切な人事配置と人材の育成が課題である。</p>
<p>改善策</p>	<p>○生活・保健指導部を中心に防災訓練の在り方や学校防災計画を見直すとともに、感染症予防も含めて保健安全に関する指導の充実を図り、地震や風水害等に対して平時から備える意識を醸成することで、「誰もが、安心して、豊かに」生活することのできる学校作りに取り組む。</p> <p>○学校関係者評価においても、「附属中学校の『サイエンススタディーズ』や『フロンティアタイム』を高校の『サイエンスリテラシー』に接続させ、上級生と下級生や高校生と中学生が学び合う機会を多く設定し、学びの相乗効果が高まるよう期待したい」とのご意見をいただいている。中高一貫企画推進会議を活用し、Y S F全体としての「融合」を進めるカリキュラム・マネジメントを進めるとともに、本校の特色である課題探究について、S S H事業に位置付ける中でいっそうの充実を目指して、指導法や体制を構築していく。</p>

2 教育活動の状況

□教育課程の状況

(関連アンケート番号：教職員 2, 3, 4, 5, 6, 18 生徒 I-1 保護者 I-2)

<p>取 組</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○「サイエンスの考え方を養う」「豊かな社会性や人間性を育む」「次代を担うグローバルリーダーを育てる」を基本方針とした教育課程を編成した。 ○中高一貫校の特色を生かし、6年間の継続的な学びを行うために、6年間の前半3年間を「基盤形成期」(中学校1～3年)と位置づけて教育課程を編成した。 ○各教科では、探究力を育てる授業として内容を深く掘り下げ、生徒の興味・関心を引き出すDEEP学習を進め、討議、体験、実験実習、発表の場面を多く設定し、学習を深めている。 ○総合的な学習の時間としての「サイエンススタディーズ」は、教科等横断的な内容についての課題探究型の学習として、本校独自の教育課程を編成している。1年生では、科学館・博物館見学、企業講演会、工場見学、地層見学、研究所見学、プログラミング実習や校外宿泊研修に向けた事前学習を行った。2年生では、宮古島校外宿泊研修で各自のテーマ設定に基づいたフィールドワークを行い、宮古島を通して日本の将来について考える機会を得た。この経験をもとに、一人1テーマの課題研究を行い、調査・実験から得た考察を論文とポスターにまとめることができた。3年生では、4名一組のチームを編成して協働作業によって課題研究をすすめた。研修旅行では交流校を訪問し、両校の課題研究を発表し合う活動を行った。 ○教育成果の発表場面として文化祭では附属中学校生徒の学習成果物を展示し、生徒によるポスター発表やプレゼンテーションソフトを用いた発表も行った。
<p>成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○保護者アンケート項目「中高一貫校として、特色のある教育課程が計画的・継続的に展開されている」において90%以上の肯定的な評価を受けており、特色ある教育課程が計画的・継続的に展開されているものと受け止められている。(5ページ保護者アンケート2) ○DEEP学習、サイエンススタディーズの課題解決学習やプレゼンテーションを高い頻度で行ってきたことにより、1年生の「読解力」「情報活用力」「課題設定力」「課題解決力」「発表力」は着実に育成されており、2年生では一人1テーマを決めて行う課題研究を進め、より体系的に探究を深めることでさらに力を伸ばしてきている。3年生で行った、チーム研究は中学生としての研究活動をまとめ上げる内容にふさわしく、チーム内でコミュニケーションを密にとりながらサイエンスの考え方に基づいて仮説、検証、実験を繰り返して、課題研究を深めることができた。 ○教職員アンケート2,3,4の項目で、肯定的な評価の合計はそれぞれ90%以上であり、教育課程が学校教育目標の具現化を目指し、生徒の実態に合わせて工夫した編成がなされており、生徒にとって分かりやすい授業展開がなされていると判断できた。(1ページ教職員アンケート2,3,4)

課 題	<p>○開校して3年が経過して中学校としての形が完成したことになるが、計画し実践してきた教科指導や指導計画には細部において改善の余地があり、カリキュラム・マネジメントを継続的に行っていくことが必要である。</p> <p>○教職員アンケート5, 6の項目では、教科指導の方法や観点別評価基準に基づいた評価・評定のあり方について肯定的な評価の合計はそれぞれ80%以上であり、一定のよい評価を受けているものの、改善の余地もあることが読み取れる。(1 ページ教職員アンケート5, 6)</p>
改善策	<p>○教科指導や指導計画について、次の3つの視点から継続的なカリキュラム・マネジメントを継続的に実施して改善に努める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科として3年間を見通した視点 ・学年として教科横断的な視点 ・本校の特徴であるサイエンススタディーズ（総合的な学習の時間）との連携を含めた全校的な視点 <p>○教科指導の方法と観点別評価基準に基づいた評価・評定のあり方について、全教員で意見を交換する機会を設け、更なる改善を行う。また、教職員が自主的に授業を公開し、校外・校内からの参加を得て授業研究を行う機会を設定する。</p>

□生徒指導・教育相談の状況

(関連アンケート番号：教職員 9 生徒 6 保護者Ⅱ-1)

取 組	<p>○規範意識を高めるとともに生徒の自主性を伸ばすことを考えて生徒指導を行った。</p> <p>○様々な問題についてクラスや学年全体で話し合い、リーダーを中心に具体的な方策を考え実行した。</p> <p>○5月、9月、1月の年3回、生徒一人ひとりと担任を中心とした教師が教育相談を行った。</p> <p>○生徒からの相談や、元気がなく悩んでいそうな生徒に教師から声をかけ、随時教育相談を行った。</p>
成 果	<p>○教師に言われる前に自分で考え行動できる生徒が増えてきた。</p> <p>○学年全体での校外行事等の活動を通じて学年としてのまとまりが強くなった。</p> <p>○教育相談を通じて、生徒と教師の相互理解が深まった。</p> <p>○生徒が困ったり悩んだりした時に、教師が相談にのる体制をつくることができた。</p>
課 題	<p>○学校生活に慣れても規範意識が下がらないような取組を継続的に行っていくことが必要である。</p> <p>○生徒アンケート項目「先生は生徒の不安や悩み事などについて親身になって相談にのっている。」の項目では、約8割を超える生徒が、肯定的な解答をしているが、約2割の生徒が否定的な解答をしていることが課題である。(3 ページ生徒アンケート教育活動等について3)</p>
改善策	<p>○常に校訓である「品性高潔・博学篤志」を意識できるように声掛けをしていき、規範意識が下がらないように指導を続けていく。</p> <p>○学期に一度行っている、「教育相談」の内容を見直し、生徒が不安や悩み事を先生に相談しやすい環境を作っていく。</p>

3 学校経営の状況

□組織運営及び教職員研修の状況

(関連アンケート番号：教職員 5, 13, 14, 15, 18、生徒 4, 5、保護者 3)

<p>取 組</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○中高一貫教育を推進するため、中高の教職員が教育課程・教育内容・学校行事・生徒指導・進路指導等について企画・立案・実施・検証・改善を重ねるための機関として、「中高一貫企画推進会議」を定期的に（月1回）開催するとともに、その内容は職員会議で報告し全体で共有している。 ○中高合同で職員会議や職員研修会を開催し、本校の教育理念や教育目標を共有するとともに、中学校としても発達障害、生徒指導、教科指導等についての研修を行っている。 ○ベテラン及びミドルの教職員に対して適材適所の人事配置を行い、スムーズな学校運営を図っている。 ○平成29年度の開校に伴い、横浜サイエンスフロンティア高等学校・附属中学校の学校運営協議会を設置し、年4回開催している。 ○常任スーパーアドバイザー及びスーパーアドバイザー、特別科学技術顧問、科学技術顧問、教育委員会事務局高校教育課、中高の管理職で構成する科学技術顧問会議を年1回開催している。 ○常任スーパーアドバイザー及び特別科学技術顧問、高校教育課指導主事、中高の管理職で構成する幹部会を月1回開催している。
<p>成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○昨年度から設置した学校保健委員会を今年度も開催し、生徒の発表を中心に内容の充実を図っている。 ○中高合同で職員会議や職員研修会を開催したり、適材適所の人事配置を行ったりした結果、教職員アンケート項目「一人ひとりの教職員が意欲をもって業務に取り組むことができる組織である」及び「各学年（年次）の運営は、情報が共有され組織的取組が円滑に行われている」については95%が肯定的回答となっている。（2ページ教職員アンケート15, 16） ○科学技術顧問会議の開催や学校運営協議会の設置により、大学や研究機関、企業との連携を進め、本校の特徴である文理融合型の科学教育を進める中で、「サイエンスの力」×「言葉の力」を育成する教育を推進する立場から具体的な提言と実行への積極的な協力を得ることができている。科学技術顧問等の協力・支援により、京三製作所・J E F エンジニアリング・A G C ・ J A X A ・ J A M S T E C 等の協力による校外研修や講話を実施し、科学・技術と現代の生活や環境、S D G s、宇宙や海洋の探査等について実践的に学ぶ機会を得ている。 ○横浜市立中学校教育研究会等との連携を図り、外部講師を招聘しての公開授業研究会を数学科・英語科において開催し、中高の教職員が研修を深めるとともに、本校の取組を広く提案する機会となった。 ○幹部会を開催し、常任スーパーアドバイザーや特別科学技術顧問に毎月の取組や生徒の活動について報告するとともに、学校運営や教育内容の改善・充実及び生徒の健全育成についての助言を得、学校の活性化を図ることができている。

<p>課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○管理職を除く教員が 16 名のため、一人当たりの校務が多く、負担が大きいことが課題である。 ○中高それぞれの入学者選抜に係る業務において、昨年度に引き続きこれまでの経験を踏まえて調整をすることができ、教職員の負担を少し軽減することができた。今後は、業務マニュアル等を整理することにより、入学者選抜業務について中高で共有し、業務を調整しながら、教職員の負担をさらに軽減していくことが課題である。 ○教職員アンケート項目「教職員が互いに研鑽し、力量を高めることができるように、校内の研究・研修体制が整えられている」については、昨年度は 66%の教職員が「あまり実現できていない」「全く実現できていない」と回答したが、今年度は 26%に減少している。しかし、新学習指導要領の全面実施に向けて、横浜市教育課程研究委員会や横浜市立中学校教育研究会等の研究協議会、横浜市教育委員会事務局主催の研修に参加し、情報収集や資質向上を図る機会を確保することができるような体制及び校内における研究・研修体制の構築と整備が引き続き課題である。（2 ページ教職員アンケート 18） ○元年度は中学に A E T が配置されたが、学校司書の配置が 9 月になり、高校の司書や図書情報部に負担を掛ける結果となった。学校司書や非常勤講師の円滑な配置をすることが課題である。
<p>改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○3 学年が完成した平成 31 年度、附属中学校における各校務分掌の担当業務及び人員配置を再整理し、円滑に業務を進めることができるようになってきている。引き続き業務の内容を精査し、業務の効率化と質の向上を目指す。 ○令和 3 年度の新学習指導要領の全面実施に向けて、引き続き情報収集に努めるとともに、授業研究の機会を設定し、カリキュラム・マネジメントのいっそうの充実を図る。 ○令和 2 年度は年度当初より、A E T、学校司書、スクールカウンセラー、サポート非常勤講師が配置されているので、十分に活用する中で学習指導や教育相談のさらなる充実に向けて体制を強化していきたい。 ○学校関係者評価においても、本校の研修の充実を評価していただいているが、本校は最先端のサイエンスの力を備えた教員を必要としていることが指摘されている。学校内外の様々なリソースを活用し、人材育成に取り組んでいきたい。

□学校に関する情報公開の状況

(関連アンケート番号：教職員 27、保護者Ⅱ-5、生徒Ⅱ-5、地域 9)

<p>取 組</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○夏の学校説明会では生徒による学校紹介のプレゼンテーションを行う。 ○「Science Frontier Junior High School News」を発行し、学校の様子を外部に発信する。 ○学校案内パンフレットは生徒のキャッチフレーズや、3 期生の写真を掲載し、より良いものを仕上げる。 ○学校説明会、志願説明会、オープンスクールなどの情報をタイムリーにホームページへ掲載する。
------------	---

成 果	<ul style="list-style-type: none"> ○夏の学校説明会では1年生による学校紹介のプレゼンテーションを行い、生徒の経験に基づく生の声を届けることができ、非常に好評であった。 ○「Science Frontier Junior High School News」を発行し、特に本校の特色である「ほんもの体験」について外部に効果的に発信することができた。 ○学校案内パンフレットでは、写真を最新のものにアップデートしたり、生徒が考案したキャッチコピーを掲載したりするなどの工夫をして、受検を考えている児童や保護者に有効な情報を提供することができた。 ○学校説明会・志願説明会等の告知や、「学校便り」の掲載等、本校に関わる情報をタイムリーに学校ウェブサイトに掲載することができた。
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ○ホームページでは主に、適性検査の情報や学校便り、学校行事のお知らせ、在校生向けの急を要する連絡を掲載した。今後は、それらに加え、各学年の行事や学校独自の取組など、学校の特色や生活の様子が、より伝わるような情報も掲載していく必要がある。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ○ホームページ上にダイアリーのページを設け、学校行事の様子や、授業の様子についてアップし、広報活動に努める。

4 いじめへの対応に関する項目

いじめへの対応

(関連アンケート番号：教職員 28 生徒Ⅲ-4、5)

取 組	<ul style="list-style-type: none"> ○いじめに関するアンケートを年4回実施するとともに、生徒一人ひとりを対象にした教育相談を行った。 ○YPアセスメントを活用して客観的に学級の現状を分析し、学年全体で情報の共有を図った。 ○いじめ防止対策委員会を開催し情報の共有を図った。 ○誰もが安心して過ごせる学校づくりに関する提言を横浜こども会議で代表者が提案した。 ○学年集会において、いじめは絶対に許されない行為であることを教師から生徒に伝え、いじめに対して毅然とした態度で対応することを示した。
成 果	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒アンケート項目「多くの生徒や保護者は学級で良好な人間関係を築いていると思っている。」及び保護者アンケート項目「お子さんは学級で良好な人間関係を築き、充実した生活を送っている」において90%が肯定的な回答となっている。(3ページ生徒アンケート教育活動等について1、5ページ保護者アンケート教育活動等について3) ○教育相談を担当だけでなく、学年の多くの教師が行ったことで、教師と生徒の信頼関係を深めることができた。 ○全ての教科の授業で話し合い活動を行い、生徒同士が自分の意見を発信し、他の意見を受信することがスムーズに行われるようになってきた。 ○生徒に関わっている教師が綿密に情報を交換することで、生徒の些細な変化に気付き、対応することができた。

課 題	○人間関係が深まるにつれて遠慮がなくなり、他者に対しての不用意な言動や相手に対して配慮を欠く行動が見られることがある。それらに対して見過ごすことなく指導していくことが課題である。
改善策	○コミュニケーションに関する研修や他者との関係についての道德の授業などを通じ、適切な距離感で他者と関わることができるように指導をしていく。